

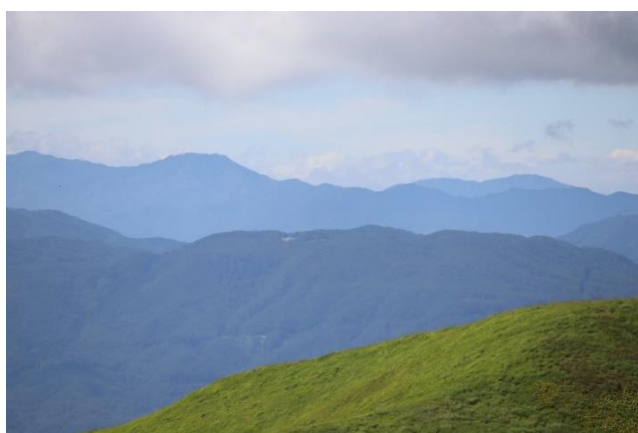
すくすく たけのこ

2022.9.09 vol.7



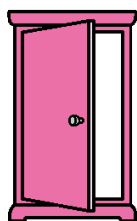
こころの“伴走者”めざして！

日の出とともに聞こえた蝉の声が、いつしか虫の音(ね)にかわり、秋の足音を感じる季節となりました。みなさま、お元気ですか？



【みんな大好きドラえもん】

子どもたちの大好きなアニメのひとつが「ドラえもん」です。どこでもドアやスモールライトなど、ドラえもんのひみつ道具を駆使して大活躍する“のび太”に自分の姿を重ね合わせて楽しんでいます。



ドラえもんが誕生して45年たった2014年には、アメリカで米国版『DORAEMON』が放映され、海外でも共感の輪が大きく広がりました。

このように場所をこえ長い年月にわたって、子どもたちの心をつかむ作品には、それだけの魅力があり、子育てにも参考になることが多く含まれています。



【主題は のび太の“成長ストーリー”】

このアニメの主題は**のび太の“成長ストーリー”**と言ってよいでしょう。

努力してもなかなか結果に結びつかず、目立ったとりえもない野比のび太。今風(いまふう)の言い方をすれば、自己肯定感のとても低い少年が、ドラえもんとの出会いを通して、本人のよさがどんどん引き出され、成長していくドラマです。その姿に子どものみならず、大人も惹かれていくのでしよう。



【人間にとって“だいじなこと”】



数ある話の中で、特に私の心に残っているのは、のび太が成人して、意中の人であるしずちゃんと結婚する場面です。

結婚式前夜、パパは、娘のしずかちゃんにこう語ります。

「のび太くんを選んだきみの判断は正しかったと思うよ。あの青年は人の幸せを願い、人の不幸を悲しむことのできる人だ。それがいちばん人間にとってだいじなことなんだからね」

と。心にジーンとくる言葉です。

のび太は器用な子ではありません。同じことをやっても、人よりも時間のかかるタイプです。最短距離を最速で歩んでいる人間ではありません。

でも、だからこそ、道端の植物や虫に目を留め、移り行く自然の姿を感じることができるよう、人の痛みや苦しみがかかる子になったとも言えます。それが**人としての優しさを育んだ**のではないのでしょうか。



そして、その**優しさが育まれたバックボーン**には、何でも相談することのできる**ドラえもんがいた**からだと思うのです。強い信頼関係で結ばれた2人。ドラえもんはのび太の足音ひとつで、何があったのかまで分かっています。ドラえもんは**のび太の心音(しんおん)**を聞くことができるのです。

【ひみつ道具を出す “タイミング”】

ドラえもんのストーリーには、ひとつのパターンがあります。簡単に言えば、①**困りごとが発生** ②**のび太がドラえもん**に泣きつく ③**ひみつ道具を出してもらって解決**、こんな感じです。

一見、教育的には勧められないような内容も、詳しく見るとこんな流れになっています。

- ㊦できごとが起こって**困る状況が発生**。
- ①のび太は、**自分なりに努力**する。
- ㊧でも、上手いかず**失敗を繰り返す**。
- ①ここで、のび太はドラえもん**に泣きつき**、**見かねたドラえもんはひみつ道具を渡す**。
- ㊨その道具を使って、**一時的には上手い**いて、**状況は変わる**。
- ①ところが、**長くは続かず**、上手いかない。**自分の力でがんばるのが一番よい**と感じる。

こんな感じのオチになっているのです。

このようにみると、ドラえもんは、はじめからひみつ道具を出していません。**のび太が自分なりに努力して上手いかず、泣きついてきたこのタイミングで、初めてひみつ道具を渡している**のです。

こうしたストーリーから、**子どもの持っている可能性を引き出すためには、まず自分なりに努力をさせて失敗も経験させる。その上で必要なアドバイスをして、周囲が応援する**——。これが藤子さんの子育て観のように思います。

【ぼくは “のび太”】

「**子どものころ、ぼくは『のび太』でした**」とは、作者の藤子・F・不二雄さん、本名・藤本弘さんの言葉です。

弱虫で泣きべそ少年のび太こそ、他ならぬ作者自身であ



り、ドラえもんは、彼の幼き日の原風景を投影して生まれた作品でした。盟友・安孫子素雄さんや、先輩・手塚治虫さんとの出会い、伝説のトキワ荘の仲間たちとの切磋琢磨など、彼の実体験から生まれた作品だからこそ、人の心を引き付けて止まらないのです。やっぱり、体験ってすごいですね。



本校の演劇鑑賞教室で上演された『トキワ荘の夏』

【子育ては皆 “初心者”】

創立者池田先生は、子育てについて、このように語られたことがあります。

「子育てといっても、**初めは皆、『初心者』**です。**自信がなくて、当たり前**です。家庭・家族というのは、**千差万別**であり、**決してマニュアルどおりにはいかない**。**自分なりに、自分の家庭を作り出して**いくしかない。**試行錯誤**でいい。**失敗を恐れる必要もない**。『**創造家族**』です」

私たちの目の前にいる、かけがえのない存在である子ども。私も親として、この創立者のお言葉を何度も読み返してきました。

【心の “伴走者” めざして】

子どもの「心の扉」の**“ドアハンドル(取っ手)”**は、外側にあるのではなく、**内側にしかついていません**。やる気スイッチ・自立のスイッチも同じです。**“伴走者の存在”**は大きな存在であり、**安心の土台**にもなっています。ドラえもんは、最高の**のび太の“こころの伴走者”**だったのでしよう。

私たち大人は、**子どもの可能性を信じる勇気**を持ちたいと思います。そして、あわてず、焦らず、じっくりとかかわっていく**伴走者でありたい**ですね。

そして、わが子と共に可能性の**“どこでもドア”**を開けていく喜びをかみしめたいものです。(晃)

